保育学生の創作紙芝居テーマの選び方について

梨本　竜子・山城いつき・上原　由美

About how to choose original picture-story show themes of the childcare student

Ryuko Nashimoto　Itsuki Yamashiro　Yumi Uehara

１．はじめに

吉村真理子『３歳児の保育』（1999）に保育者の専門性を具体的に示す実践事例がある。以下はその概略である。

子どもたちが園庭にある池の金魚に餌をやることから派生し、砂や小石を投げ入れることを面白がるようになった。保育者が注意しても一向に止める気配はない。そのため保育者等は、投石に困っている金魚の親子の人形劇を創作し演じることで、子どもたちに金魚、延いては他者への思いやりの心を育もうとするのである。劇が功を奏し、池への投石は治まった。

この事例のような対応ができるためには、幼児期の発達特性であるアニミズム（身辺のもの全てに感情があると思える）を十分に理解した上で、子どもの状況に合わせて人形劇のような児童文化財、保育技術を活用していく必要がある。保育者の養成課程において、学生は幼児期の発達を学び、様々な児童文化財や保育技術についても学んでいる。保育現場ではそれらを結びつけ、場面や目の前の子どもに合わせて活用していくことが求められるのである。そのため保育者は、子どもの現状やその心情に合わせてすぐ提供できるよう多数の絵本や紙芝居等の児童文化財を知っておく必要がある。それに加え、事例のように短時間で物語を創作する力も求められると考えられる。

児童文化財の中でも紙芝居は日本で考案され、保育の場で多く教材として活用されている。絵本よりも集団で見るのに適しており、鬢櫛ら（2005）はその教育メディアとしての効果を高く評価しているが、絵本に比べ市販されている数が少ないことから、保育者がその時子どもに伝えたいテーマに最適なものを選び難いことも考えられる。そのため、本学幼児教育学科では、数年前から卒業を前にした実習指導の授業で、学生自身が子どもたちに伝えたいことをテーマに、紙芝居の創作に挑戦している。その実践を通し、保育技術力の向上とともに自分自身の保育観と向き合うことを目的としているのであるが、近年の学生の創る物語はパターン化されたステレオタイプであることが多くなっているのではないかと感じている。画面を構成して絵を描く力、演じる力は２年間の学習を通して充分育っている学生が多いと感じられるものの、それに比して物語を創る力に関しては年々貧弱になっていっているのではないかと思えるのである。

昨年度までは、紙芝居制作の分野は担当者1名が中心的に担っており、授業では主に制作前の手順の説明、制作後の発表を行い、制作はほぼ授業時間外に学生が各自で行っていた。しかし、今年度は学生の制作過程により丁寧にかかわっていけるよう、教員３名が各１クラスずつを担当することとし、授業時間数も増やして実施した。

２. 研究の目的

本研究では、学生の創作紙芝居のテーマの選び方を分析することで、保育に必要な「物語を創る力」をどのように醸成していくべきかについて考察する。

３．授業概要

対象となる学生は、この授業までに既に様々な児童文化財についての授業を受けている。紙芝居については、１年次後期の「保育実習指導Ⅰ」の特別講義として、外部講師による紙芝居の紹介と歴史やその特性、演じ方について２コマ受講している。その後の実習では、ほとんどの学生が園で紙芝居の実演を経験してきている。

創作紙芝居制作の実践は、短期大学部２年次後期の「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」の授業の一環として行っている。全15回の授業中の主に6回程度（学生数131名：合同または3クラス分け授業）を制作および発表に充て、授業時間外の自宅学習も含め、以下のように展開する。

① 紙芝居の特質等の再確認、制作の流れ、手順についての理解
　ストーリー作りのグループ演習（＊）
② 制作にあたっての詳細な内容理解
　Ａ５版のコピー用紙を使った８～12枚のひな型の制作
③ ひな型をグループで試演し、相互検討
④ 各自の制作（２回）と演じ方の確認
⑤ 完成した紙芝居の発表と自己・他者評価

ストーリー作りのグループ演習（＊）は、各自がB4版の用紙1枚にあらかじめ大きく描かれたアルファベットに自由に線を書き足して１つの絵を完成させ、それを5、6名のグループで持ち寄って紙芝居のようにストーリーを作って演じるものである。紙芝居を創るにあたって、登場人物のキャラクター設定や台詞の大切さ、予想外な展開の面白さ等を体験的に学ぶ機会として取り入れている。アルファベットから絵にする段階ではその後の活動を伝えていないため、学生は意外な登場人物や物の組み合わせに展開を苦慮しながらも何とか話にまとめ上げ、発表では観客に笑いが絶えなかった。この演習から、自由な発想で物語を創ることを楽しんで欲しいと考えた。

写真1　授業風景

4．研究の方法

(1) 対象・方法

短期大学部幼児教育学科２年生131名を対象とし、2018年12月の各自による紙芝居制作段階の授業の最後にアンケート調査を実施し、129名より回答を得た（回収率98%）。

(2) 質問内容

質問内容は、①自分の創作紙芝居テーマのジャンル、②テーマ選択の理由、③紙芝居制作に関する自由記述、である。

5．結　果

(1) 創作紙芝居テーマのジャンル

創作紙芝居のテーマとして学生が選択したもののジャンル（複数回答）は、「生き物・自然」(40) が一番多い回答であった。続いて「友達」(35)、「食べ物」(30)、「家族」(22) の順で、子どもの好きなものや身近なものを多くテーマに選んでいるようである（図１）。また、歯磨き、片付け等の「生活習慣」を選んだ学生は17名であった。「その他」(20) の記述にあった内容は以下の通りである（表１）。

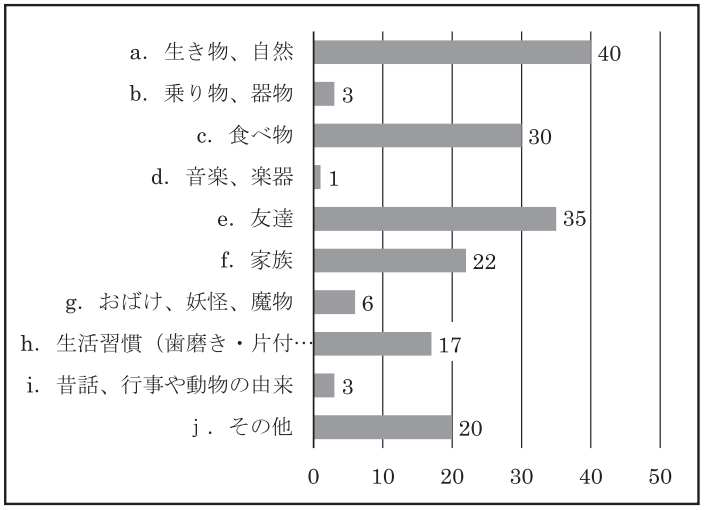

図１　創作紙芝居テーマのジャンル

表１．J.その他の記述内容

ことば遊び（２）	気持ち・情緒（２）	個性（２）	
なぞなぞ	魔法	お姫様	大きくなったらなりたいもの
やさしさ	良いことをすると良いことが返ってくる		
お笑い	防災	ふしぎ	ゴミの分別について
誕生日会	身の周りのもの	ほっぺ	便

(2) テーマ選択の理由

テーマ選択の理由（複数回答）については、「ふと浮かんだから」(61) が全体の半数近くであった。「子どもたちに伝えたい、大事なことだと思っているから」(54) を選んだ学生も多数いた。「好きな絵本やお話に近いテーマ・内容だから」(11) は全体の1割に満たなかった（図２）。「その他」の記述には、「楽しいと思ってもらえるものを作りたかったから」「子どもと一緒に楽しみたいから」などの内容があげられている（表２）。

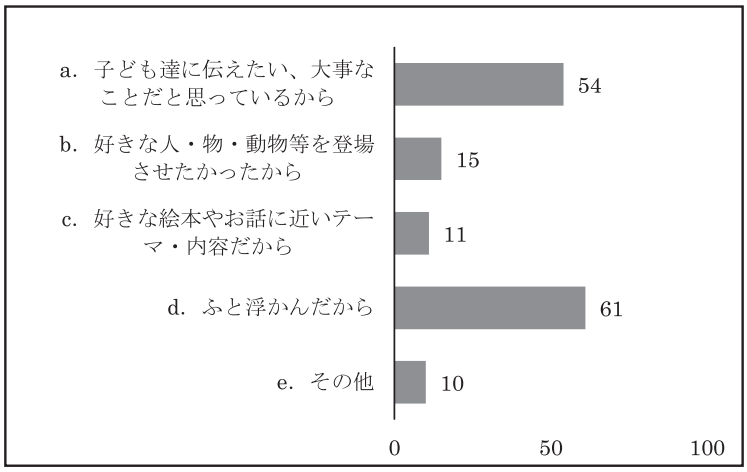

図２　テーマ選択の理由

表２．e.その他の記述内容

- 素話を参考に制作
- 自分の個性に気付き、伸ばしてほしい
- 自分が小さいときに思っていたことだから
- もとがある紙芝居であまり見ない内容だから
- 楽しいと思ってもらえるものを作りたかったから
- 子どもと一緒に楽しみたいから
- 私の将来の夢の世界をかいた
- 子どもが興味をもってきいてくれる話によく出てきたから
- 面白いものを作りたかったから
- たくさんの希望を持って日々を楽しく過ごしてほしいと思ったから
- 自分の身の周りの物や玩具に興味がもてるように

写真２　完成した創作紙芝居

(3) 紙芝居制作に関する自由記述

紙芝居制作に関する主な自由記述については、以下の通りである（表３）。

表３．紙芝居制作に関する主な自由記述

（伝えたいこと・テーマ）

・自分の伝えたいことを表現できた　・自分の思いを伝える工夫が出来た　・自分の伝えたいことを形に残せた
・自分の伝えたいことを表現することで考えが発展したり、自分の思いに気づいたりした
・手作り紙芝居は伝えたいことが子どもに分かりやすく親しみがもてると思った
・教育的ではなく純粋に楽しめるものにした　・自分が必要と思えるものが作れた(誕生会)
・子どもに生き物の興味、友だちの大切さを感じてほしいと思った
・伝えたいものというより、楽しめることを考えて作った方が閃きやすい
・テーマは自由がいい　・テーマが自由すぎると迷う
・子どもに伝えたいことにとらわれてしまって、しつけやマナーが多い

（創作）

・創作の楽しさを感じた　・絵の上手い下手ではなく愛情を込めて作った
・起承転結が不安、自分の思いが伝わるか不安　・絵が苦手なので現場では使いたくない
・発想力・想像力が向上し、出来たときに達成感がある
・取り繕った内容になりそうであったが自分らしさを取り入れた
・ストーリーや登場人物を一から考えることはとても大変だと感じた

（制作）

・友だちと製作できて楽しい　・一生懸命作ることで愛着がうまれた
・紙芝居制作は手間と時間がかかると知った　・絵を描くことが楽しくなってきた
・子どもの笑顔を想像して作成することが大事だと感じた
・描写は苦手だが挑戦する機会になった　・絵が苦手でも作れた、絵の練習になった
・絵が苦手で周りを見てプレッシャーを感じた、場面にあった絵を考えるのが難しい

（紙芝居）

・紙芝居の構造や特性を知り、読むときの勉強になった　・今後紙芝居を選ぶのが楽しみになった
・紙芝居の魅力を感じた　・読むときにねらいを理解して読もうと思えるようになった
・既存の紙芝居の作者のねがいに気づけるようになった　・作り手や観客の気持ちを考える機会になった
・完成したものを早く演じ、子どもの反応が見たいと思った

（授業）

・事前に紙芝居を読む授業があるといい　・実習前の提出が大変、早い時期から取り組みたい
・絵の具が実費で金銭的に負担　・制作する際の机が狭い、音楽を聴きながら制作したい
・誰かと協力してひとつの作品を作りたい
・友だちの作品も楽しみ、勉強になる、個性を感じ刺激になった

6．考　察

アンケート結果では、学生の創作紙芝居のテーマのジャンルは「生き物・自然」が最多であったが、実際の作品では「生き物・自然」を大切にしたい、身近に感じられるようにしたいといった内容のものはそう多いとは思えず、大きなテーマというよりは生き物が登場していたり、海のような自然が舞台だったりということから、それも含まれるとして選択したことが考えられる。それ以外では「友達」「食べ物」「家族」など、子どもの好きなものや身近なものからまんべんなく選んでおり、特に生活指導をテーマにしようと考えている学生が多い訳ではないといえる。

ところが、実際の作品の内容を見てみると「片付け」「歯磨き」等の生活指導以外にも、「けんかした友達に自分から謝ることで仲直り」「嫌いな野菜の克服」など教訓的なものが散見され、「伝えたいこと」を大人が教えるべき正しい行動と解釈したと思われる作品が多々あった。紙芝居は学生にとって、「大人の理想とするあるべき姿を子どもが楽しく理解するための教材」といった思い込みがあったのではないかと考えられる。自由記述にも「子どもに伝えたいことにとらわれてしまって躾やマナーが多い」「伝えたいものというより、楽しめることを考えて作った方が閃きやすい」と「伝えたいこと」を大人が指導すべき事柄と捉えていることが推察されるものがあった。

テーマの選択理由は「ふと浮かんだから」「子どもたちに伝えたい、大事なことだと思っているから」の回答が多く、「その他」の記述にあった「楽しいと思ってもらえるものを作りたかったから」「子どもと一緒に楽しみたいたから」などの回答も含めて、学生は過去に触れたことのある本や話を参考にしたり、身の回りの事象を主人公に据えて話を展開したりするよりも、自分自身の発想から新しいものを生み出そうとしていることがわかる。

しかし、個々に明確な願いやねらいを持ちながらも、話の展開については「友だちとけんかをしたら謝ろう」「嫌いな野菜が夢に出てきて食べて欲しいと頼む」「片付けなかった玩具が泣き出す」といったパターン化したものが多く、既存の絵本や紙芝居にありがちなステレオタイプな印象を受けるものが多数見られた。自分の発想を大事にしたいという思いや子どもたちに伝えたいことはあっても、いざそれを紙芝居にする際に表現や展開に行き詰まり、せっかくの発想が自分の話創りに結びつかず、オリジナリティーに欠けたものになってしまったのではないかと考えられる。このことについて、担当教員にはどこかで見たような印象があるものが多いが、学生のアンケートからは直接的に何かの本の内容を取り入れた意識はあまり感じられない。学生自身は既存の絵本から直接的に影響された自覚はないが、無意識のうちに過去に読んだり読み聞かせてもらったりした本や聞いた話の内容が潜在的に残っており、話創りに影響したのではないかとも考えられる。そこからは、幼児期以降に出会う絵本や話の影響の大きさも窺われ、重要性を改めて考えさせられる。

とはいえ、作品の中にはオリジナリティー溢れるものもあり、それらを作った学生にどのようにしてテーマを決めたか話を聞いたところ「将来自分がなりたいおばあさん像をテーマに書いた」「自分が泣き虫なため、泣いていても必ずそれを見守ってくれる人がいることを書きたかった」「自分の好きなウサギを主人公にした話を、自分が好きな絵を描くことで表現したかった」など、日頃自分自身について思っていることが発想のきっかけとなったようである。

7．おわりに

創作紙芝居は、子どもに何を伝えたいかという観点からテーマを決める。そのテーマを分析することは､学生が子どもに何を大切にかかわろうとしているのかにつながると考えられる。今回の研究では｢伝えたいこと」を「大人の指導すべきこと」と捉えた学生が多く、本来考えていた何を大切に保育したいと考えているかという各々の学生のもっている保育観にたどり着けなかったように思う。また、いきなりひな形制作を課したことで、テーマの決定、脚本、場面の分割、描写など幾つもの工程を一度に取り組むことになり、テーマ作りがなおざりになってしまったように感じる。さらにひな形の提出期限が実習の直前であったため、ますますテーマを練ることに時間をかけて話創りを楽しむ余裕が持てなかったと考えられる。

これらの結果をふまえ、今後の授業ではテーマの決定までに充分な時間をかけ丁寧に進めていきたいと考える。具体的には初期の段階で互いのテーマを持ち寄り、それにについて学生同士の検討の機会を設ける。その後、箱書きを行いストーリーの検討を重ねた後、ひな形を制作する。またテーマを考える際には「自分の体験や思い出を思い起こす」「自分自身をキャラクターに置き換えて話を考える」など学生の発想のヒントになるものを提案する。また、同じテーマでも展開によっては全く異なる物語になるため、今後はストーリーの展開方法についても丁寧な授業が必要であると考える。

しかし、アンケートの紙芝居制作に関する自由記述には、「自分の伝えたいことを表現できた」「自分が思いを伝える工夫が出来た」「伝えたいことを表現することで考えが発展したり、自分の思いに気づいたりした」といった記述もあり、紙芝居制作を通して自分の思いを表現することや形に残せる喜びを感じたり、改めて自分の保育観を見つめなおす機会になった学生も多く、授業のねらいには一定の成果が見られたといえる。また、「既存の紙芝居の作者の願いに気づけるようになった」「読むときにねらいを意識して読もうと思えるようになった」「作り手や観客の気持ちを考える機会になった」など、作り手の立場に立ったことで既成の作品にも作者の願いがあることや演じる際に作者のねらいを意識することの重要性に気づいたことが読取れる。加えて「今後紙芝居を選ぶのが楽しみになった」「紙芝居の構造や特性を知り、読むときの勉強になった」「一生懸命作ることで愛着が生まれた」の記述からは、紙芝居の魅力の再確認や紙芝居の特性や構造などの理解、時間をかけて手作りしたことで丁寧な表現活動が作品に価値を与えることを体験的に学ぶこともできたと思われる。さらには、「描写は苦手だが挑戦する機会になった」「絵が苦手でも作れた」「絵を描くことが楽しくなってきた」の記述からは、苦手なものに取り組むことで新しい発見を得るという保育者として大切な経験をする機会になったことが読み取れる。

紙芝居制作は学生にとって想定以上の学びがあり、今後の授業の取組み次第ではさらに物語創りの楽しさを実感できる可能性があると考える。

参考文献

1）吉村真理子『3歳児の保育』ミネルヴァ書房pp.175-177（1999）
2）鬘櫛久美子・種市淳子「保育におけるメディアとしての紙芝居　－紙芝居通史を中心に－」名古屋柳城短期大学研究紀要No27.pp.53-67（2005）
3）鬘櫛久美子「教育メディアとしての紙芝居　－保育者養成課程における取り組み－」名古屋柳城短期大学研究紀要No35.pp.15-23（2013）
4）鬘櫛久美子・岡野尚子「保育における手作り紙芝居　－指導法を探る－」名古屋柳城短期大学研究紀要No36.pp.19-27（2014）
5）小池悟「保育学生による紙芝居制作計画」文化学園長野保育専門学校研究紀要No9.pp.29-35（2017）